算数科

算数科における指導の重点(身に付けさせた	こい力) ※学習指導要領に照らし合わせて
ア 思考力、判断力、表現力等	イ 知識及び技能
数とその表現や数量の関係に着目し、目的に合った表現方法を用いて	整数、小数及び分数の計算をしたり、図形を構成したり、長さや重さ
数の表し方や計算の仕方などを考察する力を身に付ける。	を測定したり、図形の面積や体積を求めたりすることなどについての 技能を身に付ける。

教科名

	旧幸・大体の光本の出り(温度)	な光にもはフロけかたてだっ	エギマの中#n+#n	### (OD)
	児童・生徒の学力の状況(課題)	授業における具体的な手だて	手だての実施時期	成果検証(2月)
第1学年	・文章問題など、思考を必要とする問	• 問題解決学習が可能な学習単元で	通年	
	題が苦手な児童が多い。ア	は、比較・検討の場面において学級		
		みんなで意見を出し合い解決してい		
		く学習を積極的に経験させ、上学年		
		につなげられるようにする。 ア		
	・数の基礎的な理解に、個人差が見ら	・学習指導では、ICT 機器を活用する	通年	
	れ、個別に支援が必要な児童が多	ことで、どの児童にも分かりやすい		
	い。	ように指導する。毎時間のめあてが		
		確実に達成できているか、机間指導		
		しながら確認し、できていない児童		
		には、解決のポイントを指導する。		
		計算問題では、朝学習や宿題等で繰		
		り返し練習を取り入れ、定着を図		
		る。		
第2学年	• 既習事項を使って問題を考えること	・導入で前時の振り返りを行い、前時	通年	
	が難しい。また、自分の言葉で考え	の学習を生かせるようにする。自力		
	(数の表し方や、計算の仕方など)	解決で他の児童のノートを紹介する		
	を書くことに課題のある児童がい	ことで、より良いノートを学べるよ		
	る。 🗹	うにする。 🗹		
	・加減の基礎的な計算が身に付いてい	毎日の宿題で反復学習を行い、基礎	通年	
	なかったり、遅かったりする児童が	的な計算技能の向上を図る。		
	いる。 🗹			

第3学年	・学習内容を活用する文章問題や応用問題になると、自分の考えがうまく表現できなくなってしまう児童がいる。	• 問題場面がイメージしやすくなるように I C T を活用し、問題場面を視覚的に整理することで問題解決につながるようにする。 ア	通年	
	・かけ算やわり算といった計算技能の 定着に習熟の差が見られる。 <a>イ	・授業中の机間指導を充実させ、苦手 意識をもっている児童に重点的に関 わり、学習内容の定着を図る。また、 朝学習の時間を活用し、基本的な計 算技能の定着を図る。	通年	
第4学年	・既習事項を活用して問題を解くこと に課題がある。 ア	・単元に関わりのある問題を授業の初めに解くなど、導入部分で既習事項の復習をすることを重視する。また、問題を解く際に既習のどの部分を活用しているかを指導で明確にする。	通年	
	・授業で身に付けた四則計算の技能が、時間とともに忘れてしまう児童が見られ、定着に差がある。	・タブレット端末を利用したドリル問題に取り組む時間を設定し、問題を解く量を増やすことで計算技能の定着を図る。	通年	
第5学年	 ・既習事項を活用し自分の考えを表現できる児童が一定数いるが、応用問題やテストなどになると立式できず、既習事項が活用できない児童がいる。 ・作図、計算などの表現が丁寧でなかったり、定着していなかったりする児童が多い。 	 自分の考えを表現する場面では、 1つの手段だけでなく、式と言葉を 結び付けたり、式と図を結び付けた りするなど関連付けて考える場面を 設ける。 ・机間指導で理解が定着していない児 童を確実に把握することで、朝学習 等の時間に個別指導を行い、基礎基 本の定着を図る。 	通年	

	・計算処理に時間がかかる児童が一定	• 朝学習の時間に既習の計算問題に取	通年	
	数いる。イ	り組ませることで、基本的な計算技	朝学習	
		能の定着を図る。イ		
第6学年	・既習内容の定着が不完全な児童が多	・既習内容の定着を図れるように、東	通年	
	く、既習内容を活用した問題や解法	京ベーシック・ドリル活用する。		
	の説明に課題がある。ア	・単元の初めに、関連する既習項目の	通年	
		復習を導入で行い、児童の思考へと		
		つながるようにする。 $\overline{\mathbb{P}}$		
		<u></u>		
	・計算処理に時間がかかる、丁寧に作	・家庭学習での定着を図る。イ	通年	
	図ができないなどの課題がある。			
		マス計算、東京ベーシック・ドリル	通年	
		の活用など朝学習などを活用し継続		
		的に取り組む。【1		

■「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けた一人一 台端末等 ICT の効果的な活用について

- 1年:ロイロノート等を使い自分の考えをまとめ、学級全体で共有で きるようにし、多様な考えに気付けるようにする。【重点:協 働】
- 2年: ロイロノートを使い、それぞれの考えを交流する場面を意図的に設定する。また、ミライシードを活用することで基礎的な計算技能の習熟を図る。【重点:個別】
- 3年:ロイロノートを使い、児童がそれぞれの考えを確認したり、質問したりする場面を意図的に設定する。【重点:協働】
- 4年:タブレット端末の計算ドリルを活用し、自分が苦手とする単元 の復習がいつでもできる環境を整える。【重点:個別】
- 5年:自分の考えをもち、表現できるように解決の見通しをもたせる。 考えの発表では、児童のノートを黒板に映すことで考えの相違 点に気付かせたり、友達の考えと自分の考えを比較させたりす ることで、全体での話し合い活動がどの児童にとっても主体的 な活動になるようにする。【重点:協働】
- 6年:自分の考えをもち、表現できるように解決の見通しをもたせる。 考えの発表では、ロイロノートやiPadでノートに表した考 えを黒板に映し、複数の考えや式などを比較しやすい場を設定 する。【重点:協働】

全学年:ロイロノートを活用して、考えを広げる機会を設ける。

■学習の見通しをもたせることや学習を振り返ることの工夫等、「学び に向かう力」の育成に向けた取組について

- 1年:学習のめあてを児童と共に考えたり、学習の振り返りをさせた りすることで、次時への意欲につながるようにする。学習の見 通しを示すことで、主体的に学習に取り組めるようにする。
- 2年:自分の考えや分かったことなどの振り返りを書く時間を確保する。本時の学習の流れを提示し、児童が見通しをもって授業に参加できるようにする。
- 3年: 既習事項を確認することで、学習内容のつながりに目を向けさせるとともに、問題解決型の学習の後には、学習感想を書かせるようにする。
- 4年:タブレット端末の計算ドリルを活用し、自分が苦手とする単元 の復習ができる時間を設定する。
- 5年:学習のまとめを、めあてに対して児童の言葉で振り返りを表現 する。難しい場合も穴埋めなどにし、少しずつ書けるように促 す。
- 6年:学習問題から本時では何をめあてとするのか、児童自身が意図をもって取り組めるめあてを設定する。振り返りでは、めあてに対応して何が分かったのか、自分自身の言葉でまとめられるように繰り返し指導する。